

## 黙示録の「ラッパの災い」とダニエルの「2300日」との関係

このレポートは1つ前の「85 反キリストは「シリア」、偽預言者は「イラン」であるという根拠」の続編という位置づけになります。

このレポートにより、ダニエル8章の「2300日」に関する理解に若干の変更が加えられております。また、それに伴い、「終末タイムテーブル」の2012年3月版に変更されています。

前のレポートですでに取り上げた、未解決のままの第5のラッパの、「五ヶ月間」の苦しみの実体とその期間である「150日」と、他の聖書中に具体的に記されている日数（預言的期間）のつながりを確認しておこうと思います。

(※ 一般に良くある預言日数の「日」を「年」に替えて「1日」を「1年」として計算して解釈する手法がありますが、そうした解釈法には致命的な欠陥、誤りがあるという聖書的根拠について詳しく論じた、「63 ルカ21：24の「異邦人の時」は3年6ヶ月間であるとする根拠」をご覧ください。)

艱難期は一週、つまり3.5+3.5=7年間(2520日)です。

ダニエル書が提供する預言期間に、2300日、1290日、1335日があります。

このうち、「2300日」は、「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪、および、聖所と軍勢が踏みにじられるという幻」に関する定められた期間ですが、これまで、その期間の終わりには、「聖所はあるべき状態に戻る。」ということから、「待ち望んで千三百三十五日に至る者は、まことに幸いである。」(ダニエル12：12)という記述に基づいて、全てが完了する1335日の終わりと同時に終了すると捉えていました。

しかし、「待ち望んで幸いに至る」というのは、終末期の計画が全て完了し、地上の千年王国の始まりの発表と考えられることに加え、「1290日」の方は、その期間の目的に関して、明確に「日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらすものが立てられてから」の日数として定められているという表現から「1290日」の完了が、「2300日」の完了日とする方がよりの確であろう考え、理解を調整することにしました。

つまり、この「2300日」は荒憎者の罪に関連した出来事だけに限定した全期間を指し示している期間であり、ダニエル9章の「七〇週」に関する預言によれば、荒憎者は一週の間、同盟契約を結び、半週で捧げ物を廃する」ということになっています。

「都と聖所は次に来る指導者の民によって荒らされる。その終わりには洪水があり、終わりまで戦いが続き荒廃は避けられない。彼は一週の間、多くの者と同盟を固め、半週でいけにえと献げ物を廃止する。(ダニエル9：26, 27)

ここで、理解を明快にするために、ダニエルが提供する「荒憎者」に関する4つの日数を比較してみましょう。

- 1 「2520日」(一週) (9:27) 「多くの者と同盟を固める」
- 2 「1260日」(半週) (9:27) 「荒憎者」がいけにえとささげ物とをやめさせる
- 3 「1290日」 (12:11) 「日ごとの供え物廃止、憎むべきが立てられてから」
- 4 「2300日」 (8:14) 「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪、  
および、聖所と軍勢が踏みにじられるという幻」  
満了時に「聖所はあるべき状態に戻る」

こ「2300日」には、他の期間にはない、別の要素が含まれています。つまり「荒らす者のする背きの罪」(罪が荒廃をもたらす；新共同訳) というものです。

「捧げ物、聖所、万軍を踏みにじる」ことはすでに述べていますので、この「荒廃をもたらす」という罪は、また別のものであり、2300日には、これが含まれているということです。

「1290日」に関する 12章からの補足情報。

「1290日」が告げられる前に、み使いはこう宣言しています。

「ひと時とふた時と半時である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する。」(12:7)

これに対してダニエルは、「この終わりは、どうなるのでしょうか。」(12:8)

と尋ねています。この質問の意味は、「で、結局、どういうことになるのでしょうか」という、その後の事を尋ねているわけで、それに応えて、「1290日」がある。としています。

それで「聖徒の力を打ち砕くことが終わった」後の処理が当然あるはずであり、その示された「期間」は他ならぬ「聖徒に関する期間」であるに違いありません。

これらのことから、 $1260 + 30 = 1290$ 日の満了は、「聖所はあるべき状態に戻る」とする「2300日」の満了時と同じであると考えられます。

「2300日」に関連すると思われる 11章からの補足情報

「彼は契約を犯す者たちを巧言をもって墮落させる」、「聖なる契約を捨てた者たちを重く取り立てるようになる」これらは、捧げ物を廃する、聖なる所に立つ、という内容とは異なる内容です。これは、それ以前の、「多くの者と同盟を結ぶ」と表現される、前半の3時半に関わることであり、「荒廃をもたらす罪」と言われているものに含まれているものと考えられます。

では荒憎者についての、半週の前部分を含む、二つの期間、2520と2300日については、この関係はどうなっているのでしょうか。

「2520日」と「2300日」の誤差は220日です。

しかし、この二つの期間は「終了日」が異なります。「2300日」には、荒憎者がしでかす事と、その事後処理、つまり「聖所があるべき状態に戻る」までという期間(30日間)を含んでいます。

ですから、実際の誤差は250日間になります。

それでこの250日間は、荒憎者の「すべての罪」の勘定に入れられていない期間であるということことです。

半週つまり、始まりから1260日後に、「捧げ物を廃止する」という明確な行動がありますから、初めから、250日の間は、密かに、様々な人間や組織との裏交渉、密約に奔走するのでしょう。そして、250日後に、明確な形で背きの罪、棄教させるための具体的な行動がはっきり見られるのでしょう。

では、この「2300日」は艱難期の7年のどのタイミングとシンクロしているのでしょうか。これを考慮するに当たって、先ず、艱難期の勃発の状況をおさらいしておきましょう。

サタンは落とされると先ず真っ先に、「女」の後を追い、洪水をはき出します。

この時、「女」はすでに、「荒野」に導かれそこで保護されていますので、この時点ですでに前半の三時半のカウントは開始されています。

この洪水の攻撃が、獣や、「北の王」の行動としてではなく、「龍」すなわち、サタン自らの行動として描写されているのが不思議な所です。

もちろんこれを実際に、地上で行う人間がいるはずですが、明らかにされていません。

従ってこのサタンの洪水攻撃の期間中は、当然まだ、「荒らす者」の「背きの罪」や常供の捧げ物を取り除く事などは起きていません。

それで、荒憎者が起こるのは、早くても、この洪水を「大地」が飲み込み、収集がついた後から、現れ、具体的な行動を始めると考えられます。そうであるなら恐らく、この「洪水」自体が、後に、荒憎者である、「小さな角」を祭り上げるための作戦行動に違いありません。すなわち、この洪水を飲み込む立役者が、他ならぬ「小さな角」であり、イスラエルとの偽りの和平交渉がなされ、背きの罪を捧げささせる影響力を持つようになるのでしょう。

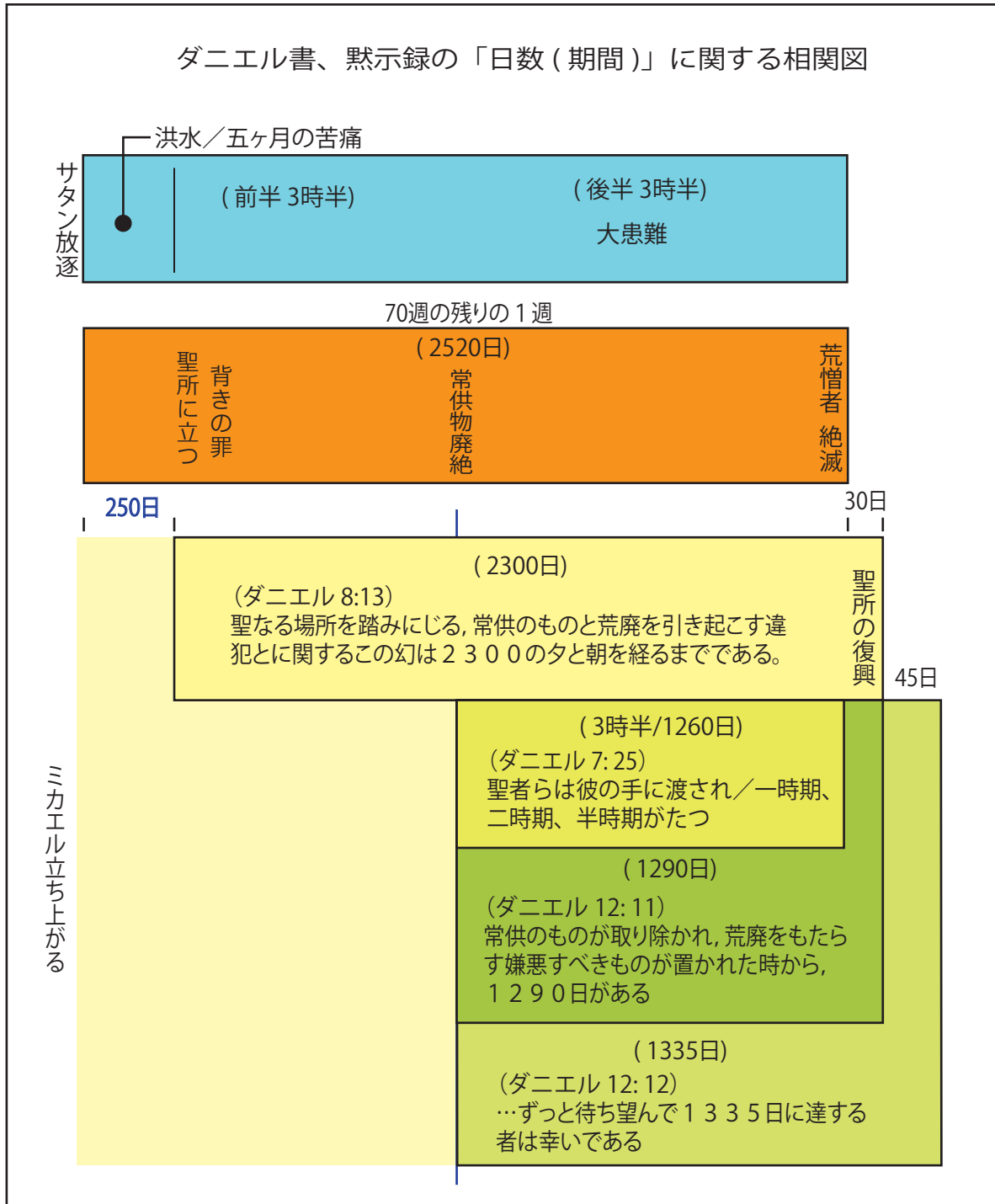
しかし、この洪水時期、そして、イナゴ攻撃期間のいずれも、荒憎者に関すると思える記述は皆無で、その姿は全く見えてきません。これらを全て総合的に考慮すると、前半の1260日の内最初からの250日間の中に、この洪水攻撃、イナゴ攻撃の出来事が起きているに違いありません。

この「250日」の期間に関して、聖書の記述が詳細を述べていない故に、考えられる可能性は2つあります。

1つは、洪水があり、これが始まりから100日間、そして、その後五ヶ月間（150日）の苦しみが続き、併せて「250日間」というもの、もう1つは、「洪水」とは、この五ヶ月間の苦しみをもたらす出来事そのものであり、それに伴う出来事を含む、「洪水攻撃」は全部で「250日」

の日数を費やす。のいずれかということになります。

いずれにせよ、それらによって、その後のための舞台が整い、そこへ、反キリスト、小さな角、北の王、緋色の野獣などの幾つもの名を持つ荒憎者が、彗星の如き煌めきを放って登場するというシナリオになっているように思えます。



さて、結論的なまとめとして、今の所、明確な根拠を手短に提示するのは、難しいので、以下は私なりの予想ということでお読み下さい。

少し前の部分で、「洪水を引き起こすもの」「五ヶ月間の苦痛を引き起こすもの」の実体が分から

ないと書きました。

五ヶ月の苦痛は、荒憎者という乗り手が馬に乗る前の段階での出来事であることは明らかですから、それらの地上での実際の行為者は「馬」だけの行動、つまり復興ローマとバチカンの結託したものということになります。何らかの、糾弾や脅しなどによって「死にたいと思う程」の苦痛を与えるが、「死なない」ということなので、それには物理的な実害はないものと思えます。

「龍」が自ら行動するとして記されている「洪水」をもたらす人間の行為者も恐らく、同じものでしょう。これも実害を与えるという意味では不成功に終わります。

また、「洪水」が「女」を対象としたものであり、「エルサレム」に対してもたらされると考えられるので、五ヶ月間の苦痛を与える対象も、恐らく、世界的な規模のものではなく、14万4千人がイスラエルの12部族から選ばれたのと同じく、それ以外の、額にしるしのないイスラエルに限定した出来事ではないかと考えられます。

サタンが落とされれば当然、世界に少なからぬ影響があるでしょうが、聖書が預言している全世界的規模の災いに関して言えば、クリスチャンを含む全諸国民が影響を被るのは、後半の3時半の大患難勃発の時からと考えられます。

しかし、世の動きや、イスラエル、あるいはエルサレムに起きる出来事を注意深く見張っている目覚めたクリスチャンは、艱難期に入った事をはっきり悟るでしょうし、そのための備えをすることができると思います。最も肝心な事は、「惑わされない」事です。

聖書は、繰り返し、「見張っているように、惑わされないように」と警告しています。

「大きなしるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである。」  
(マタイ24：24)